

報告書

ボアジチ大学交換留学 2018/9~2019/6

国際関係学部国際関係学科 4年

ボアジチ大学で過ごした一年は、私のいくつかの大切なことに関わる価値観を変えてくれました。

まず、学業の面では、では、トルコで一番偏差値の高い学校というだけあって生徒のレベルの高さには圧倒されましたが、彼らの実力はそれに相当する努力あってこそそのものなんだと、大学内で感じる事が多くありました。ボアジチの学生とはいえやはり多くの者にとって勉強とは、やはり進んでやりたいものではありません。さらに彼らにとっても母国語ではない英語でものすごい量の課題やスケジュールをこなすわけですから、その切れ端を体験したに過ぎないような私でもいかに彼らの学生生活が気楽なものでないかというのは分かりました。しかしそれらを諦めたり投げ出したりせずに、何時間かかっても必ずやり遂げる彼ら一人一人の様子がとても印象強く私の記憶として残っています。最もインスピレーションを受けた言葉は、No pain No gain (痛みなくして得るものなし)です。元々知っていた言葉でしたが、これは、日本語の勉強を文字通りコツコツと2年間続け日常会話程度の会話力を身につけたボアジチ生の友達と、ネイティブのような流暢なフランス語を操るトルコ人のフランス語教師が、それぞれ私にくれた言葉です。私も大学では授業についていくため、テストに受かるため、多くの時間を勉強に費やしました。頑張っても周りの優秀さには叶わないと思う事もたくさんありましたが、高校時代から大学までずっと努力を続けてきた彼らのストーリーを聞くと、やはり継続した努力がものをいうのだと、理解できました。それから日本帰国後から現在までも、自分の目標のために時間を作って勉強する習慣がついているのは、尊敬し憧れたボアジチの友達の存在が私の頭の片隅に存在し続けていることと、私の中で彼らによって実証された No pain No gain の言葉の重みを感じ続けているからです。

トルコではもちろん、勉強のみをしていたわけではありません。元々、宗教がどういうものなのかを知りたいという思いで、トルコを選びました。国際関係、国際政治を学ぶ過程で、常に出会うのが宗教問題です。事実として、世界には non-believers の数よりも believers の数の方が多いこと、そして宗教の対立が多く戦争や問題を起こしてきて今後も無くならないだろうということを知っていても、では実際にこの宗教が何かということを知ろうとした時には、彼らと友達になること以外に他にない、という、ある本の一文を読んだ瞬間がきっかけとなりました。実際にトルコに1年間住むうちに、たくさんのムスリムと知り合いになり友達になり、計4つの家庭に泊めてもらう経験をするうちに、ぼんやりとイスラム教のことが分かっていききました。地域差、世帯差、世代差、もちろん個人差が大きく、ムスリム全体を一括りにはとてもできないと感覚として痛感する一方で、利己主義とは正反対の、他者思いで広い心が、彼らムスリムの根底に共通してあるものではないかと感じられました。それは時に海外メディアが描いてきたイスラム教のイメージとは重ならないものでした。そして彼らの信仰は各個人と彼ら

の信じる神の間に存在するものであり、他人に影響を与えるものではありません。私はトルコに行くまで、恥ずかしいほど宗教に無頓着であったためにこのような正しい見方を持っておらず、もしかしたら私自身、得体の知れないものから自然と距離を取ろうとしていたかもしれません。しかし今思うことは、世界の多数派がそれぞれの信教をもつ世の中で、国際関係を築く一個人として、宗教や信仰者らを自分には理解できない何かだとしてただ距離をとろうとする態度は、あまりに幼稚かつ潜在的な危険性を孕むものではないかということです。私は運良くトルコで1年を過ごしこのような知見を得ることができましたが、殆どの日本人がこのような経験をする機会がないのが事実です。異文化理解、グローバル化という概念が広まり続ける一方で、その中でも大きな位置付けを占める宗教というものについて、とりわけ私たちと地球を共有する何十億という信徒たちの実情を少しでも知るという機会が、中高の教育のほんの一部として取り入れられたらいいのに、そう考えるまでになりました。現に宗教そのものに対するバイアスを失った私は、今後世界で様々な信者と関わる機会があっても、一人一人を真の個人として、見ることができるのだろうと感じています。

私にこのような経験をさせてくれた静岡県立大学とボアジチ大学、現地で出会った友達への感謝を忘れことはありませんし、そこで得た新たな知見や考え方は、私自身の将来はもちろん、今後私と関わるだろう全ての人にも恩恵をもたらすものになるはずです。